



発表 読者が選ぶ ベストブック

2016年1月号～6月号で紹介しました60冊の中から、読者の皆様にご投票いただいた結果選ばれた、ベスト10を発表いたします。(投票総数：2,174票)

読者が選ぶベストブック BEST 10

- 1位 **フー・ゲッツ・ホワット Who Gets What**
アルビン・E・ロス 著/日本経済新聞出版社
- 2位 **トヨタの自工程完結**
佐々木眞一 著/ダイヤモンド社
- 3位 **戦略にこそ「戦略」が必要だ**
マーティン・リープス 他著/日本経済新聞出版社
- 4位 **私たちはどこまで資本主義に従うのか**
ヘンリー・ミンツバーグ 著/ダイヤモンド社
- 5位 **モノ造りでもインターネットでも勝てない日本が、再び世界を驚かせる方法**
三品和広+センサー研究会 著/東洋経済新報社
- 6位 **USJを劇的に変えた、たった1つの考え方**
森岡 毅 著/KADOKAWA
- 7位 **チーム・オブ・チームズ TEAM OF TEAMS**
スタンリー・マクリスタル 他著/日経 BP 社
- 8位 **なぜ、わかっていても実行できないのか**
ジェフリー・フェファー 他著/日本経済新聞出版社
- 9位 **ロボットの脅威**
マーティン・フォード 著/日本経済新聞出版社
- 10位 **規制の虜**
黒川 清 著/講談社



フー・ゲッツ・ホワット
Who Gets What
アルビン・E・ロス 著/日本経済新聞出版社



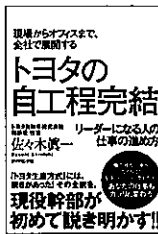
6月号紹介

世の中、自分が選ぶだけでなく、自分も選ばれる必要がある。例えば、就職先や進学する大学、結婚の相手もそうだ。このような、お互いの「選択」が必要な場で、どうすれば最適・効率的な「マッチング」(組み合わせ)が実現できるのか? 様々なマッチングをうまく機能させる方法を、ノーベル経済学賞受賞者が説く。

【読者のコメント】◎いろいろな問題をかかえる Airbnb や Uber がなぜこんなに成長したのか、その理由がよく理解できた。◎マッチメイキングの重要性は理解できる。ただ、これが無制限に行われることに不安を感じる。最近のベンチャーは暴力的、市場破壊的だと思えるのだが、いろいろ考えさせられた本でした。推薦します。◎「厚みのある市場」を狙う、というのは正にその通りだと思う。あとは、売り手側か買い手側のどちらかを起点として、マーケットをデザインするかが重要だと考える。



トヨタの自工程完結
佐々木眞一 著/ダイヤモンド社



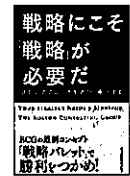
1月号紹介

「カイゼン」「QCサークル」「トヨタ生産方式」…。トヨタ自動車は、世界的に知られる様々な活動を行っている。表題の「自工程完結」は、これらに続く新たな取り組み。良い仕事をするにはどうすればいいかを科学的に洗い出す、というものだ。無意味な仕事をなくし、仕事の質を高めるこの取り組みの全貌を、生みの親が解説。

【読者のコメント】◎マネジメントとは、「仕組みづくり」がつくづく重要なのだと実感した。◎自工程の完結は我々の目付処。共感します。◎トヨタの徹底して合理的な内部が垣間見える。ここまで徹底しているからこそ、今に至るまで日本トップの会社で有り続けているのであろう。◎トヨタには脱帽。こんな会社はほかにない。



戦略にこそ「戦略」が必要だ
マーティン・リープス 他著/日本経済新聞出版社



4月号紹介

ブルーオーシャン戦略、オープン・イノベーション等、これまでに多くの戦略論が誕生した。だが、こうした手法をどんな時に適用すべきか、明確ではない。そこで本書では、「戦略バレット」というフレームワークを紹介。これを用いることで、自社に合った戦略を見つけられるようになる!

【読者のコメント】◎プロジェクトを進める時、当たり前に「先ずは戦略だ」と職場で言っていたが、自身の中ではその必要性や戦略の種類まで厳格に理解していなかったことがよくわかった。



私たちはどこまで資本主義に従うのか
ヘンリー・ミンツバーグ 著/ダイヤモンド社



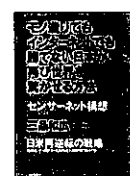
2月号紹介

「経営学の巨匠」が、資本主義の暴走に警鐘を鳴らす。今日の米国では、上位1%の富裕層に富が集中し、大企業は金の力で政治を動かしている。こうしたバランスを欠く社会を再生するには、企業、政府の他、NGOや社会事業などから成る「多元セクター」が、社会の柱として必要だという。

【読者のコメント】◎米のトランプ旋風、英国のEU離脱問題など、一見関連はなさそうだが、いずれも市井の人々が資本主義の限界を感じ始めているからこそ、顕在化している問題のように思う。



モノ造りでもインターネットでも勝てない日本が、再び世界を驚かせる方法
三品和広+センサー研究会 著/東洋経済新報社



5月号紹介

ビジネスの形が激変した今、GoogleやAmazonを擁する米国勢に、かつてのモノ造り大国日本は取り残されつつある。これを再逆転する戦略が、著者の説く「センサーネットワーク構想」だ。IoTでもインダストリー4.0でもない、日本のセンサー技術を活かしたネットワークの可能性が示される。

【読者のコメント】◎センサー技術に関してはまだ日本企業が競争優位を持っているように思う。◎センサーネットワークは有望市場だと思いが、大きな流れの中ではIoTの大波にのまれていく気もする。



USJを劇的に変えた、たった1つの考え方
森岡 毅 著/KADOKAWA



6月号紹介

2015年度の入場者数は過去最高の1390万人。新規事業の成功率97%。業績が好調なUSJのマーケティング最高責任者が、その成功ノウハウを語った。本書で明かされる「マーケティング思考」は、メーカーだけでなく、あらゆるビジネスの成功確率を高める大きなヒントになるはずだ。

【読者のコメント】◎奇しくもUSJの業績回復が鮮明になったタイミングで、TDLにピークアウトの兆しが見え始めているあたりに、踏行無常を感じる。



チーム・オブ・チームズ TEAM OF TEAMS
スタンリー・マクリスタル 他著/日経 BP 社



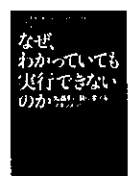
6月号紹介

「世界で最も優秀」と称される、米軍の統合特殊作戦任務部隊。だがイラク戦争では、戦力も規模も格下のイラクのアルカイダ(AQI)に苦戦した。なぜ、AQIを倒せないのか? 原因を分析した米軍の元司令官が、あらゆる組織が現在直面する状況、従来型の組織に潜む問題点について語る。

【読者のコメント】◎企業を含めた組織の力が規模の大きさや資本力が絶対ではなくなった時代に入り、これからの時代、何が大切かを考えるきっかけになる作品でありました。



なぜ、わかっていても実行できないのか
ジェフリー・フェファー 他著/日本経済新聞出版社



5月号紹介

個々の社員は優秀で、何をすべきか理解している。しかし、組織でまとまると行動に移せない——。あらゆる組織に見られる「知識と行動のギャップ」について、組織行動論の世界的権威が考察。様々な事例を通して、ギャップが生じる原因を探り、知識を行動に変えるマネジメント法を示す。

【読者のコメント】◎経営とは「実行」である。常にそれを自らに言い聞かせている。◎実行できない5つの原因が列挙されているが、いずれも大なり小なり思い当たる節があり、納得度は高かった。



ロボットの脅威
マーティン・フォード 著/日本経済新聞出版社



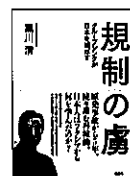
1月号紹介

今日、テクノロジーの進歩が目覚ましい。ニュースの記事を書き、自ら作曲する人工知能まで誕生している。ただ、これを喜んではかりもいられない。このまま技術が進歩すれば、人の仕事が消えかねない——。「機械が労働者そのもの」になった時、社会、経済はどうなるのか、明らかにする。

【読者のコメント】◎テクノロジーの進歩によって自動化が進んだ場合、有り余る人間の労働力はどうか。◎自動化の波は、ベーシックインカム導入等、社会制度に大きな影響を与える。



規制の虜
黒川 清 著/講談社



5月号紹介

2011年の福島原発事故は「人災」。そう結論付けた「国会事故調」で委員長を務めた著者が、日本社会の問題点を考察した。規制当局(原子力安全・保安院)が国民の安全や利益でなく、事業者(東電)の利益のために機能する「規制の虜」。これと同じ構造が日本のあちこちにあると警鐘を鳴らす。

【読者のコメント】◎単線路線のエリートは、日本社会への問題提起とあるが、特に、わが社にも当てはまり実感できた。また、グループシンクも実際日常的である。